

The current condition of the Japanese boat and its surroundings

1K08B159-2 長谷川 翼

指導教員 主査 間野 義之先生 副査 武藤 泰明先生

1、研究背景

私が高校時代から7年間打ち込んできたボート競技は、欧米では紳士のスポーツとして盛んであるが、日本では知名度の低いマイナースポーツである。テレビでの放送は全日本選手権大会をNHKで放送する1年に1回のみで留まるなど、オリンピック競技でありながらメディアに取り上げられることはほとんどない。社団法人日本ボート協会では、競技人口増加を目指し、2005年と2006年にボート競技を題材にしたテレビドラマをフジテレビとテレビ朝日でそれぞれ放送した。また日本ボート界最大の目標であるオリンピックでのメダル獲得に向けて、代表チームの強化プロジェクトや、ジュニア世代の人材発掘活動を行ってきた。しかし、いずれの政策も、現時点ではあまり効果が出ていない。

2、研究目的

日本ボートの現状と課題を認識するために、まず、日本における企業スポーツと大学スポーツの歴史と現状を調べ、ボート競技と照らし合わせる。また、競技人口の移り変わりや日本代表チームのオリンピックに向けた強化策を調べ、そこから見える日本ボート界の変化と、協会が抱える課題とを導き出す。そしてこれらを通じて、今後のボート界の強化に必要な改善点を見つけ出すことを目的とする。

3、研究方法

本研究では、日本の企業スポーツと大学スポーツの歴史と現状を把握し、ボート競技の歴史と現状と照らし合わせるために、インターネットや書籍を用いた調査を行い、日本のスポーツ界とボート競技がこれまでのような変化を遂げてきたのかを考察する。また、日本ボート協会におけるロンドン五輪に向けた強化策と北京五輪時の強化策を調べ、政策とそれによる結果がどのように変化しているのかを調べる。

4、結果

日本の企業スポーツでは、不況を理由にスポーツチ

ームを手放す企業が増えているが、ボート競技においてもそれは変わらない。競技人口は変化していないが、チーム数はここ数年で減少している。資金不足により、艇の維持や練習水域の確保が困難になったためと考えられる。大学では、スポーツ推薦制度やプロコーチの指導、日本人の体型にあった漕ぎ方の研究などにより、競技力は向上しているものの、競技人口自体は増えていない。また、日本ボート協会の強化策では、2012年のロンドン五輪と2008年の北京五輪のものでほとんど変化は見られず、代表チームに選出される選手もあまり変化はなかった。その中でも、スイーブ種目の男子舵手無フォアは、男子、女子のダブルスカルにトップ選手を送り込み、2016年のリオデジャネイロ大会も視野に入れた中長期の強化計画を進めている。

5、考察

日本ボート協会による政策は、競技力の向上や認知度の向上には多少繋がったが、競技人口の増加には影響がなかったと考えられる。ここ数年は、競技人口は変化が少ないが、チーム数は減少していることから、他の社会人スポーツと同様に、資金不足から艇の維持や練習水域が確保できず、チームを手放す企業や地域クラブチームが増えていると考えられる。また、小学生、中学生の世代から競技を広め、指導者の養成も行う必要がある。そのために、日本ボート協会が行っている公認コーチの養成の政策は、日本のボート界の実力を底上げする役割を果たすだろう。それが後に最大の目標である五輪でのメダル獲得に繋がるのではないだろうか。現在の日本は、ボートを誰でも気軽に楽しめる環境がそろっているとは言えないが、近い将来日本でも、河川や湖が整備され、ボートを漕ぐ環境が整い、誰でも気軽に楽しめるスポーツへとボートが変わって欲しいと思う。